



■主な内容

- ・第 65 回海外交流の会
町と家の「あいだ」をデザインする
- 沖縄の外部空間から学ぶ - 伊礼智氏講演報告
- ・特集：座談会 中越、東日本、熊本などの被災地報告から見てきたもの
～私たちが暮らしたい住まい・まち～
- ・被災地通信 (15) 台風 10 号、あの岩泉を直撃！
- ・この指とまれ 晩秋を愛知で楽しみませんか
- ・会員の本「教養としての都市計画・まちづくり」北本美江子



自作の沖縄原風景について語る伊礼氏 (写真：神村)

第 65 回 海外交流の会 町と家の「あいだ」をデザインする - 沖縄の外部空間から学ぶ - 伊礼智氏 講演報告 65th Intercultural Lecture: Designing Spaces to Interface Between Homes and Public Areas in Okinawa.

神村 真由美 KAMIMURA Mayumi



講師 伊礼智氏
(写真：宮本伸子)

住宅建築に関する著書が多く高名な建築家、伊礼氏の講演はソフトな語り口で、ご自身が中学生時代に描いた原風景の絵から始まった。嘉手納基地にも近く当時混沌としていた生家を含む街一帯を、沖縄らしさを活かした分譲住宅地に替える提案が卒業制作だったという。

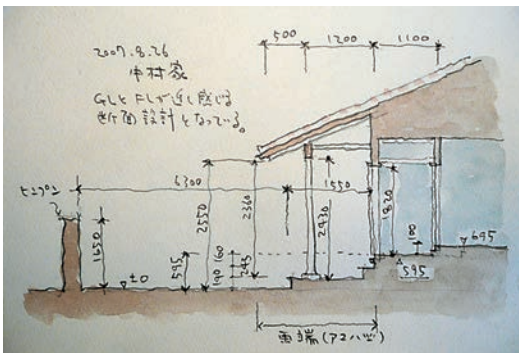
まず伝統的な沖縄の建築の特徴として、緩やかに周囲とつながっていること、そのつながりを生むヒンプン、あまはじ（雨端）などの特徴的な環境装置を、沖縄の名建築として名高い中村家や銘川家を題材に写真やご自身の断面スケッチで見せていただく。その他にも、直線にしか進めないという魔物を避けるための集落の T 字街路やくねった路や辻、潮の干満によって境界が変わり人に豊かさをもたらす海と陸の間のこと、この世とあの世のあいだとされるうたき（御嶽）という聖地の魅力、あの世の先祖に背後から守られてこの世で南向きに暮らすクサティの思想等、沖縄の興味深い伝統文化のお話の後にご自身設計の住宅の図面や豊富な写真による解説が続く。

街路からの視線を遮りながら風を通し気配をつなぐヒンプンにヒントを得たアプローチや、深い軒下空間で高

さを十分に低く抑えた軒先が周囲の風景を美しく切り取る等の手法を様々に展開された氏の作例を拝見。自身も古い藁葺き民家の縁側で過ごした幼少期の記憶を手繰りながら、町と家の「あいだ」空間の現代への可能性をお聞きする。氏がフルオープンに拘る開口部の位置やディティール、最も良い景色を見る特等席の窓辺空間の作り方等、日頃の設計の肝の部分をご存分にお話し頂く。シンプルの中に心地よい暮らしを生み出す住まいは名作庭家、荻野寿也氏との共働も相まって、周囲の環境を活かしながら非常に美しい室内外のシーンを生み出す。美のみでなく省エネ基準を難なくクリアし、Q 値 = 1.24W / m² K・C 値 = 0.42c m³ / m³ と非常に優れた性能であるという。昨今の建築事情の中で仕事が減りつつある大工の手仕事を守り作り出す「わざわざ座 + 伊礼智」の試みや、建材メーカーと共同しての商品開発など、住宅への愛に満ちたお話が続いた。

最後に「豊かなものは外部からやってくる」という哲学者、野矢茂樹氏の言葉を引用し、内に豊かな外部環境や知恵を取り込みながら、また外部へ負荷をかけない慎ましい建築とは？という問いを考え続けるご自身の姿勢で締められた。

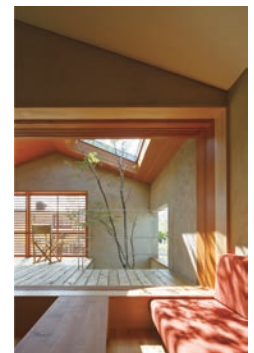
沖縄をはじめとする地域の気候や暮らしに育まれた伝統的な住文化を、現代ならではの視点で生かすことを今一度考える契機を得たことを幸せに感じる講演であった。



伊礼氏による中村家断面図スケッチ（ヒンプン～庭～軒下の雨端～座敷までのもの）



庭から住まいを考える テラスガーデンから母屋と 1 階の庭を見る (熊本・龍田の家) (西川公朗撮影)



現代の雨端としての 2 階の半屋外空間(下田のゲストハウス) (西川公朗撮影)

UIFA JAPON の被災地支援はささやかながらも地場に即した活動を心がけている。今回は何らかの形で各地で活動した 8 人の参加で紙面座談会という方法で意見を交わしていただいた。うち 2 人は遠隔地にてネット参加という広報初の試みであった。各地での体験をふまえ、活動を断片のままにせず、繋げ、今後のあり方を考察する。予測される大災害に対して、これからの支援は、連携はどのように進展したらよいか、座談会が会員間の議論につながり、課題を共有し、進展した活動、関係性へ繋がれば幸いである。(渡邊喜代美)



スマホを囲み座談会 (写真：松川淳子)

座談会 中越、東日本、熊本などの被災地から見てきたもの 出席<熊本視察>稲垣、井出、上田、宮本
 ~私たちが暮らしたい住まい・まち~ <広報> 薄井、牛山 (記録)、神村、飯田 (松川)
 Roundtable on Post-Quake Homes and Towns after our Visiting Quake-Stricken Areas.

●熊本県御船町を訪ねることに

稲垣 座談会を始めるにあたり、熊本震災で会員から集めた支援金を御船町に届けたいきさつを話します。支援先を探していたところ、会員の電気通信大学の山本佳代子さんの研究室に熊本出身の方がいらして、御船町は益城町の隣で同じように被害を受けているのにあまり報道されず、支援の手も届いていないと聞きました。

また、九州では、建築士会も様々な支援をしていて、KASEI という九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクトチームができ、いろいろな地域の支援ができるようにと、各大学の研究室ごとに割振り、ボランティアの偏りを防ぐようにコントロールしていました。御船町担当の熊本大学の田中智之先生を会員の安武さんがご存じだったので、少しでも関係のあるところで御船町に決まりました。

●被災状況について

稲垣 熊本空港に近づくにつれて、上から見ていてもブルーシートが多くなってきました。空港といえば表玄関のようなイメージがありますが、1階トイレが仮設で、まだまだ大変だなと感じました。南阿蘇村に行く途中に、家が倒壊してぐじゃぐじゃにつぶれたままの状態が見えて、直下型というのはすごいと感じました。

井出 解体待ちがまだまだ続いている感じでした。

稲垣 南阿蘇村に行く道も、道路の寸断等で、人がいない街になっていました。

阿蘇神社も、柱が座屈して、屋根が地面についた状態で倒壊していました。それなのに門前通りのお店は大丈夫で営業していました。

宮本 まわりの家のために阿蘇神社がつぶれ家を守ってくれたと彼らは言っていましたね。

稲垣 直下型地震の断層のところに全壊半壊が集中していて被害がすごく大きかったですね。少し離れると壊れているところが減って、もう少し離れると全く大丈夫で、すごく壊れている隣で大丈夫な家もあり、地盤の差でしょうね。

宮本 最後に見た益城町がかなりひどかったですね。

上田 今回、熊本の地震を見て一番感じたことは、阪神・淡路大震災の時とよく似ているということですね。あれも直下型でした。1階がぐしゃっとつぶれて2階がそのまま落ちている。神戸の生田神社も同じようにつぶれていました。結局、土台から上が持っていかれて、引抜きが起こったのではないかと、最初に感じました。

井出 益城町などを上田さんの目で見て、古い伝統建築と比較的新しいものの倒壊のかたちをどのようにご覧になりましたか？

上田 益城町を見ておかしいと思ったのは、筋交いの厚みによって、金物が全然違っていました。平成7年の阪神・淡路大震災の後、平成12年に品確法ができ、それ以降の建物は金物をだいぶつけるようになったのですが、やはり間違った金物の使い方をしたところがつぶれている。また、木摺り板があるということはモルタルということですが、それが壊れていましたね。

それと、おばあさんが、倒れかけた家に一人で住んでいて、この家は昔のつくりで、お風呂まわりがブロック積で構造体が全く違うため、ブロック特有の土台のところで線が入って傾いていましたね。昭和50年代頃の建築だと思うのですが、お風呂のブロック積は鉄筋が入っていない。

平成12年までは、ホールダウン金物を使わなかった。この金物は、基礎と柱をつないでいるもの。それまではアンカーボルトだけで、これは土台と基礎をつなげるもの。壊れている家で見えたのは、ホールダウン金物がなく、アンカーボルトだけでした。直下型は引抜きが起こり、基礎と土台が離れてしまう。教科書通りですね。

神村 神社なんかでも、基礎が石に乗っかっているだけだから、動きますね。

上田 阪神・淡路大震災の時とすごく似ていました。

宮本 ということは、阪神以降、品確法など法律が変わっているはずなのに、熊本ではそれが反映されていなかったということですか。

上田 私は熊本で同行した伊藤京子さんのお友だちの家に行ったのですが、壊れた家とまったく壊れていない



倒壊した阿蘇神社 (写真：宮本)



益城町 1階が押し潰されている (写真：上田)



益城町 モルタル壁が剥がれている (写真：稲垣)

家があり、そのご友人が言うには、地元の大工さんが昔からのやり方で丁寧に建てた家は壊れていなかった。

●宅地も被災して

宮本 私の感想ですが、益城町の病院が典型的だったのですが、建物の被害はグリーンマークだからいたしたことはないけど、周りの宅地は赤マークになっていた。宅地だけが被災している場合に、ちゃんと支援が出るのだろうか、その辺りの被災宅地と被災建物の話が、整合性がとれているのか、補助が得られるのか制度的な問題が気になりました。

上田 阪神は被災宅地が少なかったのですか。

宮本 被災宅地はいつから診断するようになったかしら。中越地震の時にできた制度かもしれないです。東日本大震災の時も津波ではなく液状化で、家は何でもないので斜めに傾いたこともありましたね。

上田 東日本では仙台市が100万人都市になるために、市を拡大し周辺に宅地造成を進め、それがごそと滑った例がありましたね。行っていないのでわかりませんが。

宮本 私、寺本さんに言われて、その後見に行ったのですが、結局ある谷筋のところの家はダメになっていて誰も住んでいないのですが、その周りは大丈夫でそのまま住んでいました。転居した方もいましたが、怖くても移転できない方もたくさんいらっしゃると思います。宅盤が大丈夫なら移転する費用など出ないでしょうから。

●熊本・益城町、御船町の仮設住宅

稲垣 益城町のテクノ仮設団地というのを見に行きました。516戸と大きなところで、AからFまで6つのブロックに分かれ、それぞれに集会室「みんなの家」がついていて、規格型もあるし、これから作るものもありました。東日本の仮設住宅の反省を生かして、隣棟間隔を少し広げていることと、その間にベンチを置いて皆がちょっと集まって話のできるところが作られました。玄関廻りもきちんとつくられ、かなり雰囲気が良くなっていると感じました。庇も標準でついていました。

井出 熊本仕様と言われていましたね。御船町は、住まい付近に小規模の仮設住宅が造られていました。

宮本 少なくとも洗濯機を外に出すのは、中越や東北など寒いところではできないです。上田さん、仮設を見たご感想はいかがでしたか。

上田 やはり、阪神や東日本から学習しているというか、坂さんや三井所さんの仮設もあり、今までのプレハブ住宅がずらっと並ぶハモニカ長屋のようではなかった。屋根に勾配をつけたり、壁の色を変えたり、配置に角度を持たせたり、いろいろ工夫がされていました。



坂茂氏設計の御船町東小坂仮設団地：木製格子で給湯器、室外機やメーター等を囲い、手摺り・表札・郵便受けを取付けたり、木の階段を設置するなど色々な表情がある。基礎がH鋼だった。(写真左：稲垣、写真右：井出)

宮本 同感です。東日本大震災の場合は、ものすごく大規模災害で、とにかくある一定数を一定の土地しかないところに詰め込んで建てざるを得なかった、というのがありますね。東日本大震災で、福島県の恵向(えむかい)のような大変魅力的な仮設もあったが、極めて一部だけで残念でした。実は熊本でそれを期待していたのですが、無かったという気もしています。

井出 恵向仮設は、木軸厚板落とし込み工法ですね。復興住宅の提案でこれから出てくるのではないかと思います。安藤邦廣さんが木軸厚板落とし込み工法の講習会を、熊本で行うそうです。士会の持田さんたちが、五木村で、地産地消ということで、現地材を使って復興住宅を展開しようとしていると思います。仮設住宅の話に戻りますが、木造はあったのですが、恵向仮設とは異なったように思えます。

宮本 木造プレファブリケーションでした。

井出 基礎の立ち上がり全部をH鋼で回し、かなりガッチリ作られていましたね。

宮本 基礎がしっかりしているのは、余震が多かったからかな。

稲垣 坂さんの仮設は復興住宅にしたいような出来ですね。それから三井所さんアドバイスの仮設は、敷地に対して45度斜めに振っていて、玄関と対面の住まいの部屋が向い合わないようになっている。

●熊本の集会室「みんなの家」

稲垣 熊本では規格型とオーダー型「みんなの家」が計画され、規格型は私達の行った時にはもう出来上がっていました。オーダー型は入居後に居住者と話し合いながら、建設されるということで、まだ現在進行中という感じでした。

その設計をJIA、建築士会などが受注して、KASEIのメンバーがワークショップの手伝いをしているという話を安武さんから聞いていました。

宮本 熊本のアートポリスの一環として、「みんなの家」の設計を行っていたということです。

稲垣 規格型「みんなの家」の特徴としては、全部外壁が黒かったというのがあり、くまモンの黒なのか他の仮設では見られないことで、びっくりしました。

井出 シンボリックでよくわかりますよね。木を黒く塗るということに多少抵抗があるらしく、グレーっぽく薄めに塗っていましたね。

●防災のソフト、まちぐるみ事前復興訓練を

薄井 我々自身も被災者になる可能性があります。今まで法末から熊本まで、鳥取も入るのかもしれませんが、私たちの暮らしに直結して、こうした方がいいのではないかと、知識というか、被災地を歩いて感じた



三井所清典氏アドバイスの宇城市当尾仮設団地：玄関口は向かいの居室に視線がいかない様に工夫され、庇を出し洗濯機を置くことができる。(写真左：井出、写真右：宮本)

ことは何かありますか。

宮本 今年9月の墨田区横網町公園での防災記念講演で中林一樹先生が主張していましたが、日本の中、どこでも誰もが被災する可能性があるから、あらゆる人が自分や家族の身を守るための準備と予備訓練をしておくべきだと。UIFAではもともと災害復興見守りチームを立ち上げたのですが、災害時により賢く生き残るための準備を提案しても良い。

稲垣 防災、減災とよく言われているけれども、自分の身は自分で守るというための知恵とか、最低限どういう準備をしたらいいとか。

宮本 家はつぶされてもせめて家具でつぶされない工夫など最低限やりましょうとか。

井出 中林先生が昨年の豊島区主催の事前復興訓練の最後の講義でその重要性を話してくださいました。豊島区では事前復興訓練を5カ所で実施しながら、ノウハウを積み上げてきているようです。今年、台東区でも事前復興訓練を始めたらしいです。

稲垣 どんなことをするのですか。

井出 最初の日は、グループに分かれて、まち歩きをする。ここは危ないとか、この緑が火を食い止めてくれるだろうとか、通気口のところは配筋が通っていないので、このブロック塀は倒れるとか。そのグループというのは、建築士だとか、司法書士、土地家屋調査士など、いろんな専門家が3~4人その地元住民集団の中に入ってサポートし、帰ってきてから報告する。その次の回は、実際に地震が起きた時を想定して、仮設ってどういうところに建てられるだろうか、仮設に避難し、そこで起こりうる課題をどのように対応しようか、ワークショップ形式でいろいろシミュレーションする。その後、区のほうから、提示される復興マスタープランに対して、住民の意見をどのように引き出し、まとめていくか。そして、最後のまとめで皆さんから感想を聞く。それを毎年やっています、地域を変えて。

飯田 そのワークショップには、一般の方も参加しているらしいですね。

井出 対象エリアが決まったら、一般の住民へは、広報誌で区役所が参加者を募ります。町内会にも働きかけているようです。申込んだ人をベースに6グループくらい班分けしていました。専門家は各協会に参加要請がきて、手を挙げた人たちが入っています。最終日での感想は、まちのリーダーというのは育てないといけないねとか、この復興シミュレーションをもっと住民に周知しなくては、という住民の感想でした。専門家からは、被災後、どうしたら良いのか途方にくれている時、こんな専門家がいるのだということを思い出して欲しい、というコメントがありました。(103号参照)

宮本 まちのリーダーは、それも複数いないと。

上田 そういう人たちが、まちのリーダーになる素地のある方ですね。

井出 そうとは限らない。

宮本 でもそれがきっかけになって、役に立つ人になるかもしれない。

●建物の防災問題

上田 奈良では、市町村の庁舎が災害復興本部になるというのは少ない。真っ先につぶれるであろうという…。

稲垣 益城町役場でも、建物外観はちゃんと建っているようでしたが、実際には内部はだめになっていて仮設プレハブでやっていたよ。

宮本 役場は災害の時に中心になってくれなくては困りますね。

神村 東京の耐震に対する取り組みが、区によって全然違いますよね。補助金の額も。

上田 一昨日、奈良市から耐震改修の依頼がきました。ちょっとハードルが高すぎて耐震改修まで行く人が非常に少ないです。昭和56年までに建てた建物を対象に、無償で建物耐震診断しますが、お子さんも巣立って高齢者しか残っていない、そういう家で実際に耐震診断して改修まで持っていけるか非常に難しい。

神村 奈良とか瓦屋根など重いものが多いですよ。

上田 でも少なくなっています。

宮本 そういう意味では、熊本は瓦が非常に多かった。

上田 瓦でも、鳥取地震で屋根が落ちているのは、昔からの土葺き工法で、土ごと落ちています。もう一つ言うと悪質リフォーム業者が、そこにやってきて、ラバー工法を勧める。瓦と瓦をコーキングでくっつけるという、絶対やってはいけない工法なんです。1,000万円近くお金を取られている人もいっぱいいますよ、関西で。

井出 土葺きの瓦屋根をコーキングで固めているのですか。

●直下型地震に備え、もっと建築士が関わる必要が

上田 昨日、鳥取で地震があり古い土蔵づくりが崩れたようです。

稲垣 やはり直下型地震について関東でも心配され、建物の補強はお金もかかたりして大変ですが、簡単なところから家具転倒防止金具などで、自分の身は自分で守ることを考えるようにしないといけない時だと感じています。

上田 バランスよく壁を配置しないとイケないと、この間夜の番組でもやっていたね。熊本でも築5~6年の建物がつぶれてしまいました。なぜかという、1階にLDKを作って2階に細かい部屋をつくると、2階の間仕切りの下に壁がないので1階がクラッシュした。危惧されることで、私も建売住宅の完成検査や金物検査にも行っているのですが、今の建売住宅がどう作られているかという、間取りは素人の営業マンが作っていると思います。

宮本 下の壁が無い場合は、それなりの補強を入れるとか、全体のバランスを取らなくてはイケないのに、構造がわかっていない人が設計しているため、そういうことになってしまう。私はそれが一番問題だと思っています。

上田 梁のかけ方があまりにおかしいということはありませんよ。でも私たちは設計監理者ではないし、検査だけなので。建築士がもう少し関わるべきだと思います。大学で教えないから、たぶんどどのくらいの大きさの梁を使って良いのかわからない。

宮本 大学出たての建築を勉強していない人にも営業をやらせているのが現状。



昭和24年発行の暮らしの手帖別冊『すまいの手帖』（須永 淑子 所蔵）

上田 建築学科を出ても、大手では、まずさせられるのが営業部門ですね。学校出たての卵にもなっていない人が営業をやっているのが現状ですよ。

●我々のできること、UIFA-HOUSEの提案

薄井 座談会が始まる前に、UIFAでモデルプランをつくらうという話が出ました。

宮本 御船町の町長が話していた60歳以上が1000万円位で建てられる住宅を、井出さんが中心になって、UIFA-HOUSEを提案しようという話です。

上田 良いと思います。各人が1000万円位でできるプランを考えて、その案をまとめて御船町に出すことにはありではないかと思う。福島の新地町で住宅相談をやりましたが、あの時に相談に見えた方が、今まで住宅を建替える意識がなかった為、何かから手をつけたら良いかかわからないという方もいらした。何かUIFAで、プラン集をつくるなど、提案したら良い。

薄井 昭和24年『暮らしの手帖』から出た『別冊すまいの手帖』を須永さんから預かってきました。4坪から25坪の提案をアクソメ等で表現されていて、わかりや

すい。

稲垣 誰がやったのかしら。

薄井 花森安治さんの表紙で、30人ほどの専門家が提案しています。

稲垣 みんなでUIFA-HOUSEにしてもいいし、ぜひそういうプラン集をやりたいと思っています。

井出 これからプラン集を作って、それを様々な人が見て、いろいろ自分の生活のイメージを組み立てられる参考、きっかけになればということですよ。

稲垣 非常にUIFAらしい活動にもなるから、とても良いのではないかなと思います。

井出 上田さんの悪質業者とかラバー工法、金物の話など、トピック的に入れたい感じはありますね。あたりまえのこととは言っても。

神村 典型的なだまされ方がありますよね。

上田 UIFAのみなさん何か一言言いたい人がいっぱいいるような気がするんですよ。

神村 みなさんたぶんいろんなご相談受けられていると思うので、これは典型的におかしい業者だとか、ポイント集をつくる。皆からアンケートで聞くのもいい。

宮本 私も中越地震の後の住宅相談で、「ええっ？騙されたの」という事例があった。

稲垣 どこで起きるかかわからないから、自分たちのことと考えると身を守る。家具の転倒防止とか、自分たちでできることから、それから、さっき井出さんが言っていたみたいに、自助共助で近隣の人と協力して守る。

被災した場合に、次に復興していくために、例えば65歳以上で、この歳になったらもう家をちゃんと建てるなんてと思っている人たちにでも、このくらいの家だったら何とかできるのではないかと希望の持てるものを提案できるといいですね。

被災地通信 (15)

台風10号、あの岩泉を直撃！ Iwaizumi Suffers a New Disaster: Typhoon No.10

岩井 紘子
IWAI Hiroko

10/7、8日、8/30日の台風10号襲来による岩泉の惨状視察に行ってみた。直接上陸した台風10号の豪雨により街道沿いの美しい小本川と両側の山々から流れ込む支流が、突如川面3.0mにもなる濁流と化したようだ。土石流、河川の氾濫、道路網の寸断など、瞬時の災害避難に戸惑う岩泉町各地域町民達の恐怖は如何ばかりだったか。今や静まり返った小本川は、根こそぎ抉り出された流木や車、家財などの残骸が此処かしこに横たわり、当時の物凄さを垣間見られた。施設物が全く無い中、岩泉町乙茂の唯一産業の岩泉乳業、犠牲者を出した介護老人保健施設ふれんどりー、隣接の高齢者グループホーム 樂ん樂ん、道の駅いわいずみ、楽天球場、そして役場近くのうれいら商店街裏側の惨劇状態は、支援で慣れ親しんだ町々でもあるせいか胸にグッと来、悔しさと悲しみで本当に辛かった。折しも、やや細くなられた伊達町長誘導なる秋篠宮眞子さまの小本防災センター避難者見舞いと遭遇。小本在住三浦浩子さんらの被災地集落案内や加藤小本支所長との話の中、今後寒さに向かい防寒肌着

等の必要性を伺い、急遽UIFAの皆さんへの声掛けで沢山の品を送ることが出来た。今回は津波被災を受けた小本を除く岩泉全町が被害を受け、東日本大震災より大変な事になったとの事。未だ炊き出し等全町民で助け合って復興に取り組んでいるとのこと。どうぞ頑張ってください。



氾濫による流木等散乱が痛々しい美しい蛇行する小本川の流れ (写真：岩井)

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2016年12月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.comこの指とまれ 晩秋を愛知で楽しみませんか 薄井 温子
Join Us To Visit Aichi in Autumn. USUI Haruko

11月12日、13日愛知は暖かく、まち歩きには最高の天気だった。集合は有松町。東海道40次目の宿・鳴海に近く、絞り染めで有名である。街道に面し当時の面影を残す建物が並び伝建地区に指定されている。各軒先には生け花が飾られ我々の目を楽ませる。何か特典があるようで着物姿の男女が多く賑やかだ。総絞りの豪華な着物の女性もいらした。我々はまず絞り染めの体験後、保存建物を改修した店で昼食しまち歩きをした。江戸、明治、大正、昭和につくられた町屋が比較して見られ興味深い。見学で遅れがちな我々を伊藤さんが先導し名古屋城へ。現在復元中の本丸御殿で屋根の柿葺き現場を見学し、大急ぎで新築の内部を見た。更に隣のRC造天守閣を登った。こちらは耐震工事のため間もなく閉館される。

翌日瀬戸市立公園内の名古屋発祥モーニングセットに満足し、窯元が集まる赤津の町に向かった。ちょうど「里めぐり」のイベント中で、20軒ほど窯元が一般公開し作品を販売している。同時に焼物の話やジャズ演奏、五平餅を各工房でふるまっている。有料で抹茶を出し茶碗の販売促進も行っていた。さすがに瀬戸焼の地である。有松と同じく赤津もまち歩きと同時にその地の産業を紹介している。

近くの多治見市に藤森氏設計モザイクタイルミュージアムを訪れた。最上階に浴室のタイル絵などが展示されている。その中に以前関わった荒川区の銭湯桜湯のタイル絵があった。見事なもので、その行方が気になっていたが、嬉しい再会だった。近くの虎渓山永保寺では素晴らしい建物と紅葉に感激し、多治見駅で解散した。

伊藤京子さんのご主人をはじめ、名古屋の会員の皆さんにお会いでき、楽しいこの指とまれだった。



有松の山車(写真:薄井) 名古屋城前で集合写真(写真:正宗量子)

■役員会報告

2016年度第3回9月21日 熊本地震支援金御船町贈呈および視察報告 岩泉町台風被災支援準備 横網町公園防災カフェ開催報告 第65回海外交流の会11月26日開催決定準備 この指とまれ愛知日程決定準備 ミニニュース投稿依頼 NL104号発刊 NL広報用配布先検討

2016年度第4回11月25日 岩泉町台風被災支援報告 熊本御船町復興住宅プラン集準備 第65回海外交流の会伊礼智氏講演会準備 名刺作成準備 日本建築学会業績賞ヒアリングについて この指とまれUR都市機構見学会準備 来年度総会の検討

■会員の本 Member's Publication

「教養としての都市計画・まちづくり」

北本 美江子 著

渡邊喜代美 WATANABE Kiyomi



都市とは何か、都市計画・まちづくりは何を目指すのか、地域のアイデンティティは？と北本論を幅広く展開している。欧米の都市計画の成り立ちは、原論整理して分かりやすく、日本の都市計画とまちづくりに至っては、バブル崩壊から大震災、人口減少まで広く概観する。何をめざすかと題した項では、建築のありようにもふれ、知見や旅先での体験も重ね試論を展開する。担う専門家の項では、コンサルタント、大学・学会、行政職員、建設会社、デベロッパー、ジャーナリズム、金融機関まで総じて登場する。

地域のアイデンティティ論は、体験も含め、掛川、パラオ、シドニー、ご自身が住んだ世田谷、仙台、杉並区、文京区、パリなどが登場する。パリは北本さんの連れ合いの赴任地で合計5年余の暮らしの場であった。余談だが、北本さんの住んだパリ16区には私の古くからの友人、マルク・ブルディエさんも住んでいて、20区は仕事場であった。北本さんのパリ生活では、マルクさんとの交流もあったという。奇遇である。また余談だが、セーヌ川はかつてゴミだらけで氾濫多く、今のパリ市街地は100年かけた人工地盤の街。16区もまた浸水した歴史があると地理学の本で知った。東京ゼロメートル市街地の活動では、時々セーヌと中川七曲りを重ねて、災害対策と同時に親水都市を議論している。さて先に進もう。アイデンティティ論では、3・11以降の岩泉、福島会津も登場する。さらに北本さんの旅したまちアジア、中東、ヨーロッパが、専門家の目線で観察。北本さんの真髓である。北本さんの世代で無ければ接し得なかった巨匠たちとの体験談は、古希個人史ながら、いい時代をすごした世代であると思う。ぜひご一読をお勧めします。書店には出していないので、希望者は北本さんのメールへ。QYA00763@nifty.com

■編集後記

座談会の後、御船町を訪れる機会に恵まれ、より感慨深い経験に(牛山)復興住宅の提案に夢を乗せる師走(宮本) U・Jの活動を支えるエネルギーは何！と思うに会員の教養度か！と思いつつ北本都市論を読む。2017よろしく♪(渡邊) 高齢期の住まいとは、やはり私の「そば」に親しい人が居る・寄る場、ということかと(井出) 会話に参加できなくても、原稿を読むことで参加できるのが編集担当のメリット？(須永) 奈良からの初テレビ会議面白かったです(飯田) 日だまりに目をほそめてネコひとり(薄井)